

棟方さん

田口恒夫

棟方さんは版画家です。ところがその版画の本当の良さが私にはよくわかりません。ですから棟方さんについて語る資格はないのですが、人としての棟方さんには、たいへん強く引きつけられ、その人柄や考え、感じ方には深い影響を受けました。

何年前か、文化勲章を受けられた時、NHKの「青少年を考える」というラジオ番組でアナウンサーと対談しておられるのを聞いたのが、私にとっては、棟方さんという人との初めの出会いでした。そのお話に感動しそれからもう百回以上も繰返しその録音を聞きました。その後ご縁があって個人的にも何回かお会いしましたし、「非常勤講師」になっていただいて講義をしていただくこともできました。

棟方さんは少年時代から、自然の中の本当の美しさに心をゆさぶられる思いがしておられたようです。それは我々が普通に言う「美」とか「芸術」などというものを越えた、なに

か魂のいぶきのようなものを感じさせます。

若いころいつも写生をしに行っていた公園についてこんなふうに言っています。

「あやめが咲いたり、オモダカが咲いたり、ねえ、藤の花が咲いたり、とってもきれいな景色でした。もとの合浦公園というのは、……もう海は真青で、砂地でねえ、松がきれいだし、八甲田山がきれいだしね、もうパラダイスでしたかねえ。何ひとつ悪いものはありません。何ひとついいものばかり。ねえ。ですから、ひとりだけでやっばり、気もちが大きく、太く、ねえ、深く、幅広く、立派に、位高く、なるのは当りまえですものねえ、はあ、細いものはひとつもありませんものねえ。太る、大きい、幅広い、そういうものばかりですものねえ」

私は児童学を学ぶ者のひとりとして、いったいどのようなしたら、今日の子どもたちに、このような「感動する心」を育てることができ、美しさと真実に感ずることのできるおとなになってもらえるものかと考えさせられます。

棟方さんは小さいときから、自分自身の中に、なにかかけがえもなく尊いものがあることを感じていたようです。絵を

描くようになった動機について、こんなことを言っています。

「なにかねえ、嵐のようか、波のようかね、雨のようか、嵐のようか、雷のようかね、そういうものが、グルグルグル行ったり来たりしていた思いが、体の中にはいつていましたねえ……」そして、そういう思いに駆られて仕事を続けて来たといっています。

もちろん貧乏でした。「たでしね、私はね、その、苦勞をね、苦勞と思いませんでした。うん、ま、苦勞ではあったけれども、僕はねえ、みじめだと自分を思ったことないですよ。まあ、いくら貧乏してもねえ。飯食えないとき、何度もありました。もう何度もありました。もうご飯も食えない、焼き芋も食えないとき、ありました。……それでも僕はねえ、「おれはみじめだ」と思ったことないです。いつも幸せな、いつも幸福な、いつもねえ、もう、盛んな、ものだと思っていましたねえ」

あるとき、棟方さんの宗教についてうかがったことがあります。棟方さんの感じ方の基礎には、深い信仰があるようです。それは仏教のひとつの古い宗派で、「融通念仏宗」という

のだそうです。ある人の善意の念が他の人に融通されて届き、それが実るといふ教えだということです。たとえば……「どこか遠くの、イギリスのいなとか、アフリカの海岸とかに住んでいる人が「棟方はばかだけどあれは本物だから、あれにいい仕事をさせたい」と思ってくれるとね、その思いがね、融通されて、飛んできて僕の胸にはいるの。それがねえ、生まれ出てくると、ほんものの仕事になるんです。けれどもね、「自分」というもので胸がいっぱいになってはだめなの。融通されてもその念がはいれないの、いっぱいだから……」「結局はねえ、自分で自分の仕事をしているというきは、自分の仕事をしていないことになるんですよ。その、ほかの、大きい、ことが動いていて、その人を、仕事させているんですね。それがだいじなんじゃないでしょうか」文化勲章を受賞したときのインタビューでアナウンサーに「おめでとうございます」と言われたときの棟方さんのことばの中にも、そういう「感じ方」がにじみ出ていました。「はあ、やあ、皆さんのおかげであります。ありがとうございます。ありがとうございました。まあ世の中の大きい恩をね、はつきりいただいた思い、いっぱいあります。はい、ありがとうございます」（お茶の水女子大学）